

「KUBOTA REPORT 2018 事業・CSR報告書」に対する第三者意見



神戸大学大学院 経営学研究科
教授

國部 克彦氏

SDGsへの対応

KUBOTA REPORTの今年度の特徴は、国連が採択したSDGs(持続可能な開発目標)と自社の活動を融合させたところにあります。「食料」「水」「環境」の3つの分野を、それぞれSDG2、6、11と結びつけ、さらにそれ以外に関連する目標を配置する体系は、SDGsに対して、全社的に対応する方針を示すものとして高く評価することができます。また、世界各地での活動や主要製品とSDGsの関連性を示しているところも、クボタの事業活動全体で、SDGsがさらに具体的に展開されるであろうことを期待させます。

SDGsからKPIへの展開を

クボタの事業活動とSDGsの関係を整理した次のステージは、SDGsと連携したKPIの設定とその展開にあると思います。クボタとSDGsの関係は全事業領域に関わるので、活動を進めるためには、マテリアリティ分析が欠かせません。クボタではすでに環境保全活動についてマテリアリティの特定を行っていますが、さらにSDGsについても、個別のターゲットの優先性を検討することが、今後の課題であると思います。また、ダイジェスト版の特集記事の内容も、それぞれSDGsに関連づけて書かれていますが、もう少し具体的にデータを示しながら、クボタの貢献を示されたほうが説得力が増します。次年度へ向けての展開に大いに期待しています。

社員が創意工夫できるCSR活動を

クボタのCSR活動については、すでに昨年以前から意見を申し上げていますように、基盤面ではほぼ完成に近づいており、実際の活動も充実していると評価できます。今後は、この基盤の上で、社員が創意工夫をしながら活動できるプロジェクトを推進されてはどうでしょうか。CSRの責任とは社会に対する応答(response)の意味ですから、社員一人一人が、どのように社会に応答できるのかを考えさせて活動させるようなプログラムが有効だと思います。このような活動が社会問題の解決につながり、将来のクボタの事業機会の獲得にもつながっていくのではないのでしょうか。SDGsの導入を機にぜひ検討していただきたいと思います。

コミュニケーション手段としての報告書を

クボタのCSR報告書は大変充実したもので、情報量も豊富ですが、今後はコミュニケーションツールとしての面も考慮されるとさらに良くなるでしょう。特に、ダイジェスト版は、その年の目標と成果がストーリーとして理解できるような表現が有効と思います。また、ステークホルダーとの対話や社内でのミーティングなど、具体的な活動している人の声を読者に伝えるように工夫されれば、より有効なコミュニケーションツールになるでしょう。

第三者意見を受けて

2009年度より継続して國部先生より貴重なご意見を賜り、厚く御礼申し上げます。

今回、「SDGsと自社の活動を融合させている」「CSR活動の基盤がほぼ完成に近づいている」「情報量が豊富で充実している」点について、評価をいただき、大変励みになります。

一方で、「SDGsについての、個別ターゲットの優先性」に対するご意見については、自社事業との関連性や実現可能性、および機会とリスク等を検討し、優先課題を明確にしていきたいと思っております。また、事業活動とSDGsの関係性については、具体的にデータを示しながら、クボタの貢献を表現するよう努めてまいります。

「今後はコミュニケーションツールとしての面も考慮するとよい」とのご意見については、ステークホルダーとの対話の機会を増やし、それぞれの声に対し積極的に取り組み、広く皆様にお伝えできるよう努めてまいります。

クボタグループは、企業理念「クボタグローバルアイデンティティ」を経営の根幹に位置づけています。「食料・水・環境」の3分野は、どれもSDGsとの関連が深く、クボタの事業機会と社会的責任は、ますます大きくなっています。

最も多くのお客様から信頼されることによって、最も多くの社会貢献をなす「グローバル・メジャー・ブランド」になることを目標に、これからもクボタグループ3万9千人が一丸となって、社会の皆様へ信頼され必要とされ続ける企業グループをめざします。



(株)クボタ 常務執行役員 CSR本部長
諏訪 国雄